The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フォーラム「WHOと日本」開催報告
Author(s)	
Citation	目で見るWHO. 2010, 44, p. 4-7
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86794
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フォーラム「WHOと日本」開催報告

9月15日(水)大阪国際会議場において日本WHO協会フォーラム「WHOと日本」を開催致しました。全国各地より170余名の皆様にご参加いただきました。

プログラム

第一部　「進行する都市化と健康を考える」

講演1　「都市化と健康」

WHO健康開発総合研究センター所長
J.クマレサン氏

第二部　「WHOへの日本の貢献」

講演2　「WHOが期待する人材」

東京女子医科大学教授　遠藤　弘良　氏

パネル・ディスカッション

「WHOへの人的貢献を進めるために」

東京女子医科大学教授　遠藤　弘良　氏
サクラアートミュージアム
主任学芸員　清水　靖子　氏
大阪大学大学院教授　中村　安秀　氏

第三部　交流情報交換会

WKC所長　J.クマレサン氏

フォーラム第一部では本年度世界保健デーテーマ「Urban Health Matters」にちなみ、WKCクマレサン所長より、「都市化と健康」についてご講演いただきました。その講演録は、本誌にて収録致しております。

レシーバーで同時通訳を聞く参加者

フォーラム第二部「WHOへの日本の貢献」では、東京女子医大遠藤教授より「WHOの期待する人材」についてご講演を頂きました。

世界での活躍を目指す参加者

サクラクレパスミュージアム主任学芸員　清水靖子氏

WHOの活動が人生のあらゆるステージに関連する健康問題に対処し、生活各方面に密着した基準や規制づくりを行っていること、WHOの仕組みが、世界保健総会―執行理事会―本部事務局―地域事務局といった組織で運営されていること、神戸にはWHO健康開発総合研究センター（WKC）があること、WHOで本部事務局長をされた中島宏氏をはじめ、尾身茂氏、進藤奈邦子氏、一盛和世氏など活躍された人材は多く日本人への期待は大きいが、約2500人の職員中で昨年末時点日本人は35人、1%台に留まり、約20%にのぼる財政負担に比しても非常に少ない実情にあることなどをお話いただきました。

東京女子医科大学教授　遠藤弘良氏

その後、当協会理事の大阪大学中村教授をコーディネータに、遠藤教授、サクラクレパス清水氏が加わったパネルディスカッションに移りました。

まず、サクラクレパス清水氏により企業の立場から、ら、その社会貢献活動の実績を踏まえて、企業CSRと健康とのかかわりや事業関連ノウハウを生かした人的社会貢献の話がなされました。

大阪大学大学院教授　中村安秀氏

また、国際的に活躍する人材を育成することについて、国際保健コンソーシアムによる「オールジャパン」、「チャンプール（混じる）」、「グローバル」などをキーワードとするコーディネータのプレゼンを踏まえ、会場からも活発な発言が相次ぎ、日本からWHOや国際保健衛生分野をはじめ国際社会に有能な人材を輩出し人的貢献を進めていくための有意義な議論が展開されました。

フォーラムに引き続きホワイエにて開催された交流情報交換会にも、講師を囲み、WHOコラボレイティングセンターや公衆衛生関係研究者をは

パネラーの質問に答える参加者

交流情報交換会で歓談される参加者

じめ、企業関係者や国際ボランティアを実践する学生など幅広い層から約70名の参加者を得て、なごやかな懇談のうちに今後の活動展開の基礎となるネットワークの輪を広げることができました。

今回のフォーラムは、日本医師会、日本商工会議所、大阪府、大阪市、社団法人生産技術振興協会のご後援とともに、株式会社サクラクレパス、サラヤ株式会社、ダイキン工業株式会社、大日本除虫菊株式会社、テルモ株式会社の各社様によるご協賛により、社団法人日本WHO協会が主催し開催することができました。ご協力に感謝申し上げます。

2009年春に発刊した『目で見るWHO 39号』の事務局だよりで、「学校の授業で進藤奈邦子さんのDVDを見て、自分も同じような道を歩きたいが、医師免許は取るべきでしょうか」という女生徒からの質問に中村安秀理事が「途上国の人々の健康を守る仕事はWHOだけではありません。ユニセフやNGOでは、文科系の出身者も活躍しています。『国際保健医療のお仕事』（南山堂）にはいろいろな学部を出た先輩たちの声が掲載されているので一読されたらいいかもしれません」と答えています。

この本に関しては今回のフォーラムでも遠藤先生から紹介されています。

フォーラム「WHOと日本」に参加された若い方々のご意見

久保達彦（産業医科大学公衆衛生学教室講師）

以前から国際保健の場で働きたかったのですが、すでに35歳を過ぎてしまいました。今からでも国際機関で活躍できることは可能か？

この質問に演者の遠藤先生から、「外務省のJPO派遣候補者選考規程では35歳以下と規定されているが、まずボランティアとしてWKC等で働き、そこの公募に応じるのも一つの案だし、エキスパートとして会議等に参加することも国際的な立場で貢献できることではないか」とアドバイスがあった。

宮内満美（大阪府立大学、国際保健サークルwell-be）

国際保健に興味関心は今までからあったのですけれど、具体的にどう行動すればいいのかわかりませんでした。今日のフォーラムに参加して、そのヒントをたくさん得ることができました。WHOのことを知っているつもりで、実はあまり知らないということに、今回のフォーラムに参加して気付きました。学校の教科書にWHOのことがもっと詳しく載っていたら、もっと早い段階で若者がWHOに関心を持てるのではないかと思いました。社会の教科書のコラムで載せてもらえるように提案してみてはどうでしょうか。

また、この協会は人材育成に力を入れていると伺いました。私達のような国際保健の場で活躍を目指している若者に、これからも人材募集とかの有益な情報を提供していただきたいのです。

社団法人日本WHO協会は国際保健の場で活躍を希望される皆様の支援を、一つの事業として展開してまいります。